

全校のみなさん、おはようございます。

今日から三日間、一日体験入学が行われます。高校生の皆さんは普段のどおりの学校生活をおくりながら、中学生をしつかりお迎えしましょう。中学生の皆さんは、高校生の姿を通して高校生活をイメージしていただければと思います。

さて、皆さんがお聞きになっっているこの放送は「朝の法話」といいます。瞑想の姿勢で、心を落ち着けて、聞こえてくる法話の言葉に耳を傾けてください。

今朝は、『阿弥陀経』という経典に書かれている「共命鳥」のお話をしたいと思います。

極楽浄土には白鶴、孔雀、鸚鵡など色美しい鳥がいます。それらの中に、1つの体に頭が2つある「共命鳥」という鳥がいました。

2つの頭が1つの体を共有しているこの鳥ですが、この2頭、実はあまり仲が良くありません。お互い気に食わないことがおこると、離れたいのですが、体が1つのため、離れることができません。その鬱陶しさから、ついには相手を殺したいと思うようになりました。

ある時、一頭が「これは美味しい木の実だから食べてごらん」と、もう一頭に勧めました。一頭は言われたまま木の実を食べました。しかし、この木の実、実は猛毒で、知らずに食べた一頭はあっという間に死んでしまったのです。木の実を食べさせた一頭は嫌な相手が死んで清々しました。ところが、頭は別でも体が一つだったため、自分自身にも毒が回り死んでしまいました。

皆さん、この話を聞いてどのような感じましたか。私たちも「共命鳥」のように、時に「あの人」さえいなければという思いを心に秘めていたり、時に邪魔なものを排除したりすることがあるかもしれません。「共命鳥」のように、邪魔なものを排除すると、その瞬間はすっきりします。しかし邪魔なもの排除すれば全て思い通りになるのでしょうか。

私たちはそれぞれが、別々の「いのち」を生きていると思っっています。しかし、「共命鳥」の話でわかるよう、私たちは互いに関係し、影響し合い、支え合いながら、実は共に1つの「いのち」を生きているのです。その「共なるいのち」を象徴するのが、経典の説く「共命鳥」なのです。